大塚敬節
矢数道明　責任編集

近世漢方医学書集成

53

森　立之

名著出版刊

NANJING UNIVERSITY OF CHINESE MEDICINE
南京中醫藥大學
1954
南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 53
森立之
第II期 全30巻

昭和五十六年四月二十三日 発行

編者 大塚敬節
矢数道明
発行者 中村安孝
発行所 株式会社 名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番(代)
振替口座 東京七—一〇六四番

予約限定版

製版所 株式会社 日本写真製版社
印刷所 有限会社 伊藤印刷
製本所 辻本製本所

落丁本・乱丁本はお取替えします。

3347—0904—8324

責任編集

大塚　敬節

矢数　道明

編集委員

山田　光胤

寺師　睦宗

大塚　恭男

矢数　圭堂

松田　邦夫

森　立之肖像

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

凡　例

一、本書第五十三巻「森立之」には、『神農本草経』『遊相医話』『経籍訪古志』を収録した。

一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、版本の場合、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。

一、底本は次の通りである。

神農本草経　版本　三巻攷異一巻一冊

遊相医話　版本　一冊

経籍訪古志　『解題叢書』(国書刊行会、大正五年)所収

一、解題は、大塚恭男(北里研究所附属東洋医学総合研究所研究部長)が執筆した。

一、巻頭の森立之肖像は、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』(昭和十一年、刀江書院)によった。

森　立之

大塚恭男

出自と経歴

医家としての森氏は宗順（または宗純）に初まる。宗順の父は武士で、主家滅亡の際に捕えられて殺された。このことに思いをいたした母が遺子宗順の武家仕官をとどめ、医家に育成したといわれる。宗順は京都に生まれ、松岡意斎のもとで針術を学んで、のち盛名を得たという。寛永一一年（一六三四）一月一八日に没した。

二代仲和は名を吉成という。父同様松岡意斎に師事し、京都で名を得た。寛文三年（一六六三）一一月四日、享年六〇歳を以て没した。

三代養竹は名を友益、表字を雲竹という。寿全と号した。仲和の嫡子で母は岡氏、寛永八年(一六三一)一月晦日に京都に生まれている。父祖同様松岡氏の門に入ったが、のち江戸に出て明人五雲子のもとで学んだ。また、江戸で医業を行い、腹診をよくしたという。正徳二年(一七一二)六月一一日、八二歳で没した。

四代養竹は名を共之といい、中虚、額浪、竹翁等と号した。養竹はその字である。父にならって五雲子流の医業を継いで名を得た。延享三年(一七四六)三月三〇日、七七歳で江戸に没した。

五代養竹は名を親徳という。老いてより伏牛と号した。享和元年(一八〇一)一一月二四日、七二歳で没した。

六代養竹は名を恭忠という。馬邑と号した。初代より五代まで仕官せず市医として終始したが、六代になって初めて備後福山の城主阿部伊勢守正倫、同備中守正精の二代に仕えた。文政四年(一八二一)六月二二日、六七歳で没した。

六代養竹恭忠は養子をむかえ、この人の子がここで問題にしている枳園立之である。立之の養父は本来七代目を継ぐべきところであったが、放蕩のため離縁となったので、立之は祖父養竹の養嗣となり、七代養竹を襲った。川瀬一馬は『慊堂日暦』の天保六年(一八三五)閏七月一日条に「森養竹号愚然受業五雲子、(中略)世々不仕、至祖父、始仕福山凡二世、小森幸二為之養子、愚心疾、去而為僧、今猶往来其家」とあることより、この小森幸二が立之の実父ではなかったかと推定し

ている。

七代養竹は名を立之(たつゆき)といい、文化四年(一八〇七)一一月、江戸北八町堀竹島町で生まれた。字は立夫、初め伊織、中ごろ養真、のち養竹と号した。生年月日の詳細は不詳であるが、ずっと後年の明治一八年一一月二五日に誕辰の宴を開いたとの記録があることより推せば、文化四年一一月二五日が出生日かとも思われるが、もとより推測の域をでない。立之七五歳の時、明治一四年秋に自撰した「枳園立之寿蔵之碑」に「余は文化四年丁卯十一月を以て江戸に生まれた」とあるので、一一月までは確かであろうと思われる。

実父は六代養竹の養子で離縁となった某であることは前述した通りで、母は家つきの娘で皆といい、八一歳の長寿を保ったという。

立之と、『経籍訪古志』に名を連ねる渋江抽斎については、森鷗外の『渋江抽斎』に詳しいが、同書によれば、両者の出会いは文化一四年(一八一七)のことである。立之はこの邂逅を「弟子入り」と称していたそうであるが、この時、師の抽斎は一三歳、立之は二歳下の一一歳であった。

その四年後の文政四年(一八二一)には祖父恭忠が没している。そして、その二年後の文政六年に、立之は抽斎の許を去って、抽斎の師である伊沢蘭軒に直接師事することとなった。伊沢蘭軒については森鷗外の『伊沢蘭軒』に詳しい。幕末屈指の考証学者として高名の蘭軒は、名を信恬、字を澹甫、通称を辞安と称した。蘭軒はその号である。立之と同じ福山藩の医官で、安永六年(一

七七七）に生まれ、文政一二年（一八二九）に五三歳で没している。多くの秀れた門人に恵まれたが、中でも次の五人は蘭門五哲と称された。渋江抽斎、森立之、岡西玄亭、清川玄道、山田椿庭らがそれである。

立之は文政中は本郷丸山の藩邸内に起居していた。蘭軒の許で医を学び、社中の吟行に必ず加わって作詩したものの一部が今に伝えられている。

文政一二年に蘭軒が没してから天保初年（一八三〇）頃までの立之の消息は詳らかでない。天保四年に立之は佐々木氏勝を娶っている。当時立之は二八歳、勝は二三歳であった。結婚後、藩邸を去って、神田お玉が池に家を構え、天保六年には子の約之が生まれている。またこの年の夏には師と頼む狩谷棭斎が死去している。狩谷棭斎は名を望之、字を卿雲、通称を三右衛門と称した。安永四年（一七七五）高橋高敏の子として生まれ、二五歳の時狩谷保吉の養嗣となった。考証学に詳しく、市野迷庵、渋江抽斎、海保漁村、森立之らはいずれも師事している。天保六年（一八三五）閏七月四日、六一歳で没している。

天保八年二月には、立之の言葉を借りれば「故あって祿を失い」祖母、慈母および妻子を伴って相模の地に落魄した。祿を失った理由として、鷗外は立之の好劇が高じて、ある時役者とともに舞台に出ていたのを、阿部家の女中にみつけられ、評判となったためとしている。しかし、川瀬一馬が立之の孫女鐶から聞いた話はやや異なっている。立之がある遊女を好きになって通いつ

めていたところ、女に迫られて道行ときまった。ある夜、ひそかに手をとりながら屋根伝いに逃げて行こうとしたところ、急に女に突きとばされて屋根から落ち、自身番に捕えられ身分が露見してしまったためであるという。この女には実はすでに意中の男があって、立之はただ利用されていただけだったというのである。

いずれにしても、あまり香ばしからぬ、さりとてあまり深刻なことではなく、傍目にはややこっけいにうつる理由で主家を追われた立之は、一時江戸で浪人生活をしていたが、とうとう負債がかさんで、家族を連れて夜逃げをした。当時三一歳になっていた立之には、もう何人かの門人がいた。その一人を頼って相模に逃げたのである。この間の事情を前出の立之自撰の「枳園立之寿蔵之碑」は、ほぼ次のように伝えている。

天保八年二月故あって祿を失い、祖母、慈母および妻子を伴って相陽に落魄した。祖母は浦賀において没し、遂に大磯、大山、日向を歴て津久井県に至った。この間の一二年は辛苦あげて言うべからずという状態であったが、またその中に楽しいこともあった。なかば儒を、なかば医をもって日を送っていたが、時には子供に読み書きを教えたりもした。目に奇籍を読み、耳に異聞を聴き、外に出れば手に刀圭を握り、足に山川を渉り、内外二科はもちろん、或いは收生(産科)を、或いは整骨を、さては牛馬鶏狗の病気までも、治を乞う者には術を施さないものはなく、皆実事をこれ求めて、頗る発明するところが多かった。また山に入って薬をとり、溪に下っては魚を釣

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

った。その間、『桂川詩集』、『遊相医話』を著わし、また学問に裨益すると思われることは一々筆録して後攷に備え、既に百余巻に至った。その他、『神農本草経』、『素問霊枢』、『傷寒論』、『金匱要略』、『扁鵲倉公伝』、『四時経』、『奇疾方』などにそれぞれ攷註を行った……。

右のように落魄時代を伝えているので、この間の一二年間は学者としての立之にとっては、望まずして与えられた研学のための絶好の機会であったといえるかも知れない。いまふと連想されるのは、大学革新運動でバリケードを作ったりしてベルリン大学を追われたウイルヒョウが、ヴュルツブルクに落魄した五年間に歴史的な『細胞病理学』を完成させたことである。スケールは違うが、人生の機微というか、「塞翁が馬」を地で行ったような興味深い一齣である。

弘化五年(嘉永改元・一八四八)五月に漸く主家への帰参が許されて、江戸にもどった。この年、幕府の躋寿館で多紀元堅が督事する『宋板千金方』の校刻に助校することの内命を得て、これが帰参に有利な条件となったものといわれる。

帰参にあたっては蘭軒の子息で立之の親友であった伊沢榛軒・柏軒兄弟や渋江抽斎らの尽力があずかって力のあったことは、鷗外の『渋江抽斎』の説くところである。

嘉永二年の正月を神田お玉が池の新居で迎えることができた立之は、一月二三日の躋寿館の開講日に初めて聴聞列席した。

嘉永四年春には『神農本草経攷註』の石玉部が脱稿した。同書は安政元年(一八五四)に完成す

るが、この年に立之は初めて躋寿館の講師となって本草学を講じている。

嘉永五年一一月に、立之が兄事した伊沢榛軒が没した。同年一二月に『屠蘇方』を著わした。翌六年藩邸に移り、しばしば藩主公子正教の諸遊に陪従するようになった。

安政元年には既述の通り『神農本草経攷註』が刊行され、躋寿館の講師に任ぜられたが、同年末には医学館の『医心方』校刊事業にも助校を命ぜられた。また本所緑町の多紀元堅の別荘に毎月抽斎らと集って『経籍訪古志』の編纂に従事したのも、この頃のことであろうといわれる。当時のことを回想した立之の明治一八年筆の『経籍訪古志』跋には次のようにある。

「渋江全善、森立之、海保元備、伊沢信道、堀川済らの仲間が毎月一、二回夜を卜して本所緑町の元堅の別荘緑汀に会し、一同環座して古本を広げて論定し、会後に宴を開き、それぞれ酔に乗じて、二州橋上月を踏み、詩を詠じながら帰った。それは三十年前のことで、当時は邏卒の警邏もなく、馬車の轟く今日とは大変な違いであった……」。

安政三年(一八五六)には『蘭軒医談』を印行している。これは立之が少年の頃蘭軒に学んだ時に筆記しておいたものを上刻したものである。

安政五年一二月一五日には将軍家茂に謁見が許され、御目見医師に列せられた。

安政七年(万延改元)三月三日には井伊大老暗殺事件がおこったが、立之はこれに非常な関心をもって、当時の記録、巷説、落首などを広く集めて『桃雪録』を著わした。なお同年九月には立

之が助校として参画した『医心方』が完成した。世に謂う『安政版医心方』で、今日行われている諸本の底本となっている。

文久二年(一八六二)一一月下旬には、不都合のかどで閉門を命ぜられた。理由ははっきりしないが、翌三年春には許されたらしい。同年秋には伊沢柏軒が没した。

元治元年(一八六四)正月二三日の恒例の躋寿館開講日には、子の約之もはじめて列席した。この年の四月五日に清川玄道が没した。立之はこの年学館講書の功労を以て月俸を賜わることとなった。またこの年には『遊相医話』が印行された。

慶応四年(明治改元・一八六八)は、躋寿館では恒例の発会式も行われず、定時の講義も休みがちとなった。それでも立之は『傷寒論』を講じていたが、四月二一日には当分の間休会にする旨の廻状が学館世話役からだされ、六月一〇日には遂に閉館されることとなった。理由はいうまでもなく、幕府から明治新政府への政権交替に伴なうもので、閉館の廻状は多紀安洲の名で立之父子、今村了庵、橘宗俊の四人に発せられた。

同年七月には船で西下し、福山の城南医者町に居を卜した。明治改元は九月八日であった。

明治二年一〇月二七日、病中の東京藩邸の御隠居(阿部正寧)に侍するよう命ぜられて、一一月八日に本郷丸山の藩邸に着いた。翌三年二月末に伊沢棠軒が代って在番となったため、三月一六日に東京を発ち、福山にもどった。

明治四年正月には『伊呂波字原考』が成って序を附した。この本は七年に刊行された。四年六月三日に、子の約之が三七歳で急逝した。そして、同じ年の一一月三日には妻の勝が六一歳で没した。あとには嫁の陽(三〇歳)と二孫女、鐄(一〇歳)・柳(八歳)が残った。約之と勝はともに福山の賢忠寺に葬られた。その後ほどなく、立之は吉野に行くと云って漂然と家を出たまま上京して福山には戻らなかった。

明治五年五月に上京し、同月二七日文部省十等出仕に補せられたと「寿蔵碑」にみえる。上京当座は湯島切通しの店造りの家を借りて住んだ。その後、福山から家族を迎え、神田元岩井町四〇番地に移転した。勤務先の方は、文部省をまもなく免官となり、医学校編書課に移ったが、ここも永く勤まらず、朝野新聞、工学寮の本朝学課長等を転々としたが、八年一〇月にはここも免ぜられている。

明治六年福山に残された家族が上京して、神田元岩井町の新居で立之と再会すると、立之にはすでに後妻がいたので驚いた。この後妻は百合という、篁村氏の女であったが、百合もまた明治一二年八月二六日には没している。すると又家人と離れて、日本橋坂本町に借室し、婢「きよ」を使って住んだが、のち水谷町に移り家族と一緒になると「きよ」に暇を出し、新居におちつくとまもなく「とめ」という女を雇い、一三年一月二六日に「菊」と改めさせた。この「菊」は三年ほど立之のもとに居たが嫁に行き、あとに「そよ」が来た。

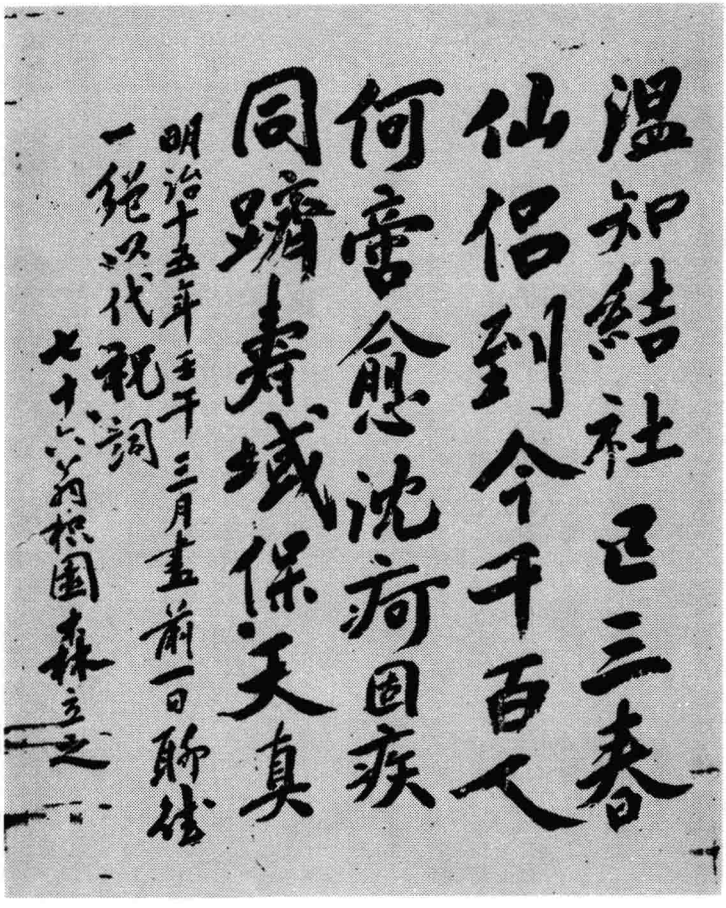
六年に上京して神田元岩井町に居を定めてから、正名学舎と称する私塾を開いて、さまざまのことを教授した。月謝は五〇銭で、土曜・日曜を休講とし、平日は午前八～一一時、午後三～六時の間を授業にあてたという。また、各種代作をも行った。発句は一句五銭以上、詩は絶句一首二〇銭以上、律は一首五〇銭以上、文章、序跋、引札名弘などそれぞれ規定があり、また動植物鑑定と不審文字質問は一品、一字につき三銭よりとした。

一二年には同志とはかって温知社を組織し、神田五軒町一四番地に事務所をおき、月刊誌『温知医談』を刊行し、また一、六両日に講義を開いた。一の日は医経経方、六の日は経書で午後一～四時の間に行った。

一二年一二月一日附で大蔵省印刷局に出仕することとなった。初任給は月俸四〇円で、一六年一二月に五〇円となった。そして一八年一月には罷役となっている。この年の夏頃から喉頭癌を病み、同年一二月六日夜八時頃七九歳の生涯を終った。墓は目白・洞雲寺にあったが、後に寺は池袋三丁目に移されている。

この死を目睫にした一一月二五日に病気が一時小康を得たので、日本橋の三文楼で誕辰の宴を開き、くじ引きで来客に自らの蔵書を与えた。『和漢医林新誌』六七号にはこの時の記事がのせられており、次のような今村了庵、遠田澄庵の賀詩が紹介されている。

賀枳園翁病起開宴　今村了庵



明治15年温知社全国大会席上における森立之の揮毫書

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook